

講義題目「哲学の諸問題 Problems of Philosophy」

言語哲学、認識論、心の哲学、社会哲学にわたる気になる哲学的問題を取り上げ、解説した後、各自で答えを考えてもらいます。

私が重要だと考える哲学の問題を取り上げます。言葉の意味の問題から、社会問題まで、ほぼ哲学の全領域にわたる多様な問題をとりあげますので、退屈することはないはずですが、一つ一つが消化不良になる可能性があります。それを防ぐために、予習と復習をしてもらう必要があります。

(以下のように授業計画を書きました。ただし、多少の変更の可能性があると思ってください。)

1 導入と概観

2 言葉の意味とは何か？ 私的言語批判、真理論・真理条件意味論、主張可能性意味論、意味の使用説、推論主義意味論、問答論的意味論

3 「あれ」で対象指示するとき、何をしているのか？

指示と述定 □直接指示論、指標詞の意味論、可能世界意味論。

4 私たちが発話するとき、何をしているのか？ 言語行為論 □命題行為、発話の前提の妥当要求、発話内行為、発話媒介行為。ヘイトスピーチ

5 分析的真理は存在するのか？ クワイン:分析/総合の区別へ批判、意味の全体論

6 科学とは何か？ 論理実証主義とその挫折

7 科学は進歩しているのか？ 新科学哲学:

8 脳と心はどう関係しているか？ 非法則的一元論、消去主義

9 意志は自由か？ リヴェの実験をどう解釈するか？

10 「私」とは何か？ 自我論:個人主義と共同体論 □

11 人権をどう正当化するのか？ □人権の正当化、フェミニズム

12 AIに道徳を要求できるのか？ AIと法。「攻殻機動隊」と「サイコパス」の哲学的問題、

13 マスコミとインターネットは社会をどのように構築しているのか？ 社会問題とジャーナリズム

14 私たちは何故物語に引き付けられるのか？ 物語的知と理論的知、物語文の分析、価値判断と物語的知

15 人はなぜ問うのか？ 問うことの重要性とは何か？

問いと推論、問いと理論、問いと言語

3 成績評価 50%出席、50%レポート

三回以上の欠席者のレポート提出を基本的に認めません。

§ 0 導入と概観

1 哲学とは何か？

philosophy < φιλος + σοφια

ヘラクレイトスやヘロドトスによって、形容詞や動詞の形でいくらか使われていたが、名称として確立したのは、ソクラテスやプラトンが用いるようになってからとされている。

中国西学において「希哲学」と訳されていたものを、西周が「哲学」（『百一新論』1874年）と訳す。

「哲学とはより深くより広く考えることである」（入江Facebook[哲学の森]

2 <考える>とはどういうことか？

考えるとは、問いを立てそれに答えることである。

考えるとは、推論することである。

3、<より深くより広く>考えるとはどういうことか？

<より深く>考えるとは、普通 p と考えられているとすれば、「なぜ p なのか？」と問うことである。

<より深く>問うとは、普通「Q ですか？」と問われているとすれば、その問いの前提 q について、「q なのか？ もし q であるとすれば、なぜ、q なのか？」と問うことである。

=====

ミニレポート課題

1、<より広く>考えるとは、どういうことでしょうか。

2、以上に関連して、哲学的な問いを立ててください。

=====

§ 1 究極的に根拠付けられた知は存在するのか？

1、ミュンヒハウゼンのトリレンマ

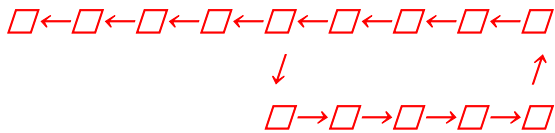
（参照、H・アルバート『批判的理性論考』御茶の水書房（原書1968））

ある命題の基礎付け（根拠づけ）を行おうとすると次の3つのどれかになる。

(1) 無限遡及



(2) 演繹における循環論法



(3) 特定の一時点での作業中断



ところで、このいずれの場合にも知の究極的な基礎付けには至り得ない。
ゆえに、知の究極的な基礎付けは不可能である。

ミュンヒハウゼンのトリレンマ

p	「知の根拠付けが無限遡行する」ならば、	s	「知の最終的根拠づけは不可能」
q	「知の根拠付けが循環する」ならば、	s	「知の最終的根拠付けは不可能」
r	「知の根拠付けが断言に基づく」ならば、	s	「知の最終的根拠付けは不可能」
pかqかr			
		∴ s	

注1：ディレンマ、トリレンマ、の説明

dilemma (ディレンマ、両刀論法) :

(1) 単純構成的ディレンマ
 (pならr) & (qならr)

$$\frac{p \text{ } \text{か} \text{ } q}{\therefore r}$$

(2) 複合構成的ディレンマ
 (pならr) & (qならs)

$$\frac{p \text{ } \text{か} \text{ } q}{\therefore r \text{ } \text{か} \text{ } s}$$

$$\begin{array}{l}
(3) \text{ 単純破壊的ディレンマ} \\
(p \text{ なら } q) \ \& \ (p \text{ なら } r) \\
\hline
\neg q \text{ か } \neg r \\
\hline
\therefore \neg p
\end{array}$$

$$\begin{array}{l}
(4) \text{ 複合破壊的ディレンマ} \\
(p \text{ なら } r) \ \& \ (q \text{ なら } s) \\
\hline
\neg r \text{ か } \neg s \\
\hline
\therefore \neg p \text{ か } \neg q
\end{array}$$

trilemma (トリレンマ、三刀論法)

$$\begin{array}{l}
(1) \text{ 単純構成的トリレンマ} \\
(p \text{ なら } s) \ \& \ (q \text{ なら } s) \ \& \ (r \text{ なら } s) \\
\hline
p \text{ か } q \text{ か } r \\
\hline
\therefore s
\end{array}$$

2 ミュンヒハウゼンのトリレンマの議論への批判

クラフトは、ミュンヒハウゼンのトリレンマを次のように批判している。

<ミュンヒハウゼンのトリレンマの議論は、論理学を前提している。つまり、単純構成的トリレンマの推論が妥当であることを前提している。

$$\begin{array}{l}
p \supset s \ \& \ q \supset s \ \& \ r \supset s \\
\hline
p \vee q \vee r \\
\hline
\therefore s
\end{array}$$

しかし、他方で、「単純構成的トリレンマが妥当な推論である」という命題については、その根拠を問うならば、それはミュンヒハウゼンのトリレンマに陥り、根拠付けを失う。ゆえに、ミュンヒハウゼンのトリレンマの議論は、自己論駁的である。>

この批判を認めるなら、「いかなる知も究極的な根拠づけをもたない」は主張できない。しかし他方で、「究極的に根拠づけられた知が存在する」も主張できない。

2 3種類の「なぜ」質問

疑問文は、決定疑問文と補足疑問文に分けられます。

補足疑問は、疑問詞を用いた質問です。「何」「どれ」「誰」「どこ」「いつ」「どのようにして」「なぜ」などがあります。

「なぜ」の問いは、「何」の問いに言い換えることができます。

「なぜ出来事Eが起きるのか？」→「出来事Eの原因は何か？」

「なぜ行為Aを行うのか？」→「行為Aの理由は何か？」

「なぜ主張Pは真なのか？」→「主張pの根拠は何か？」

つまり、「なぜ」質問は、次の三種類に分けることができる。

- (1) 出来事の原因を問う「なぜ」
- (2) 行為の理由を問う「なぜ」
- (3) 主張の根拠を問う「なぜ」

しかし、「なぜEがおきたのですか？」と問われて、「その原因は…です」と答えることは、文法的には、正しくない。文法的に正しい答えは「なぜなら、…だから、Eが起きたのです」という形式の文になるだろう。「…だから…」というこの形式は、推論である。「なぜ」の問いの答えは、厳密に言えば、推論形式を取る。推論は、説明するための形式であり、「なぜ」の問いは、出来事の原因や、行為の理由や、主張の根拠についての、説明を求める問いである。返答が文ではなくて、推論となることが、「なぜ」の問いの特殊な点である。

#ミュンヒハウゼンのトリレンマと関係するのは、(3)である。

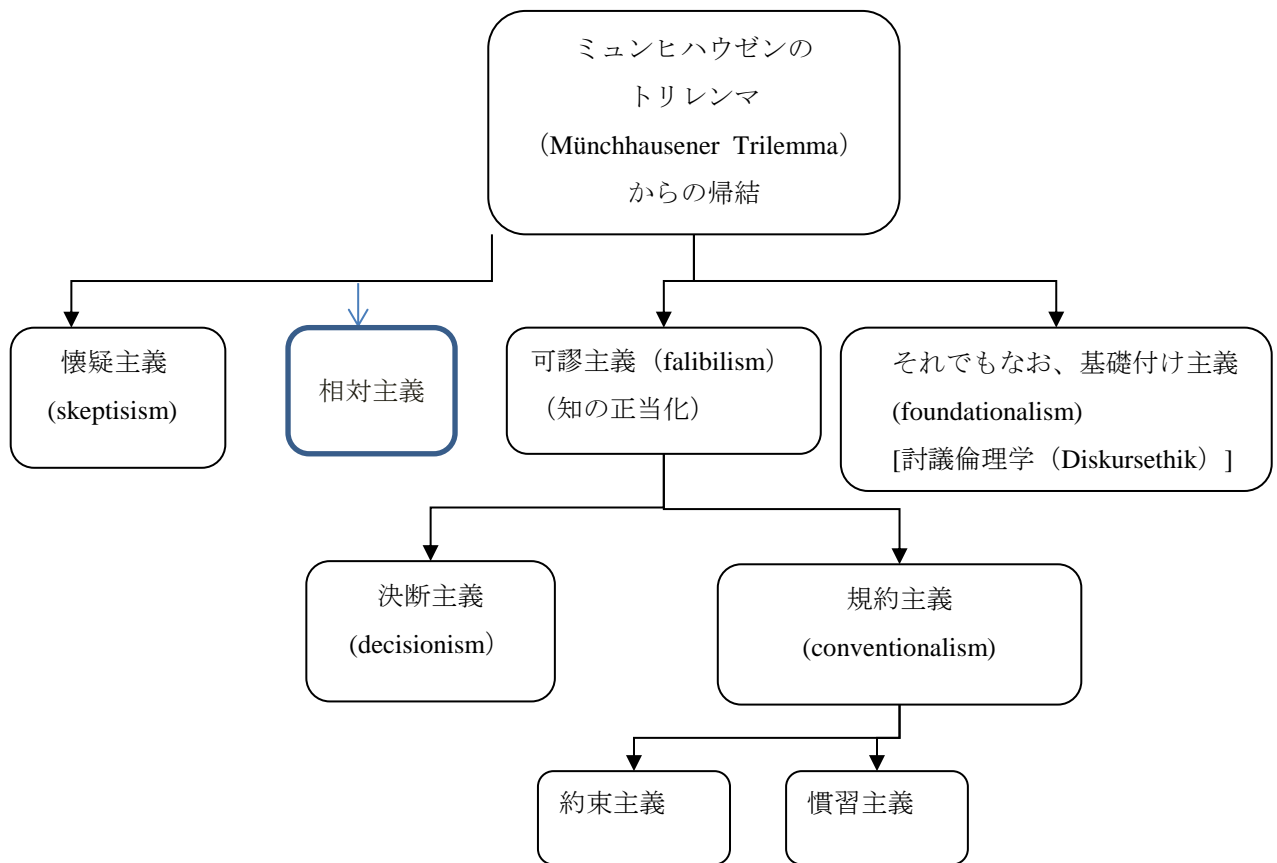
(1)と(2)の「なぜ」も、もし「なぜ、なぜ」と問い続けると、同様のトリレンマになる。しかし、それらが引き起こす問題は、(3)の知の基礎付け問題とは別種のものである。

(1)に関していうと、知の基礎付けに関しては深刻な問題を惹き起こさない。なぜなら、もしある出来事の原因が分からないとしても、その出来事が起こったことが疑わしくなる事はないからである。

(2)に関していうと、この系列がある種のトリレンマになっても、知の基礎付けに関しては深刻な問題を惹き起こさない。なぜなら、「なぜ…したいのか」という問いは、意図の存在を前提しており、この問いに答えられなくても、意図の存在が脅かされることはないからである。

通常「なぜpなのですか？」という問う者は、pであることを前提している。しかし、出来事pの原因がわからなくても、行為pの理由がわからなくても、出来事や行為が無効になることはない。しかしpが主張である場合、pの根拠が分からないときには、pの主張を維持することはできない。そこで(3)の「なぜ」の問いは、深刻な問題を惹き起こす。

3 ミュンヒハウゼンのトリレンマからの諸帰結



「基礎づけ主義」が批判されるとき、帰結するのは次の3つの立場であろう。

(1) 懐疑主義:「すべての主張は疑わしい」は、自己論駁的である。

(2) 相対主義

グローバルな相対主義:「すべての真理はただ相対的に真であるにすぎない」
これは自己論駁的である。これを回避するためには、次のように言う必要がある。

ローカルな相対主義:「(この主張の真理性を除く)すべての真理は、ただ相対的に真であるに過ぎない」

しかし、ローカル相対主義は、「ミュンヒハウゼンのトリレンマ」のゆえに、これを証明できない。

(3) 可謬主義(決断主義、規約主義)

例えば、ポパーやアルバートの「批判的合理主義」は、「基礎付け主義」をとらず、「可謬主義」をとる。「可謬主義」とは、確実に真であることが証明された命題を学問の出発点にするのではなく、とりあえず真らしい命題を出発点にし、その命題をテ

ストにかけ、テストによって反証・反駁されない限りで、その命題を採用し続けようとする立場であり、すべての命題につねに誤謬の可能性を認める立場である。

しかし、相対主義について言えることは、可謬主義についても同様に言えるだろう。

グローバルな可謬主義：「すべての知は可謬的である」

これは、「…「「「すべての知は可謬的である」は可謬的である」は可謬的である」は可謬的である」…」と無限に反復して閉じないので、成立しない。これに対して

ローカルな可謬主義「（この知を除く）すべての知は、可謬的である」

これを証明することは、「ミュンヒハウゼンのトリレンマ」の論証ゆえに、不可能である。ただし、可謬主義にとっては、このことは致命的ではない。

(a) 決断主義(decisionism)

(b) 規約主義(conventionalism)

約束主義（あるとき、ある人々による、自覚的な約束）

慣習主義（いつ、誰によるのかわからない、慣習）

決断主義の困難：

困難1：決断主義者の行う決断が私的な決断だとして。それが成立するためには、**私的言語が成立しなければならない**。しかし、私的言語は不可能である。なぜなら、

規則に従うこと

規則に従っていると信じること

この二つの区別ができないからである。

困難2：決断主義は、自由に理性的に決断できる主体であることを前提しているが、しかし、そのような主体であることの保証はない。つまり、自由に決断したつもりであっても、そうではない可能性が高い。

規約主義の困難：

限定的規約主義：これには「規約主義のパラドクス」「規則遵守問題」がある。つまり、私たちが規則に従うためには、規則の適用の規則が必要である。また規則の適用の規則に従うためには、規則の適用の規則の適用の規則が必要である。…以下同様に、無限に進む。したがって、規則に従っているということの保証を与えることはできない。

根源的規約主義：これはその都度、規則と規則に従っていることを、規約するという立場であり、私的言語によって可能になる。しかし、私的言語は不可能であった。ゆえに、根源的規約主義も不可能である。

(3) **基礎づけ主義：**それにもかかわらず、確実な知があると主張する立場。

①自己知の自明性「私が存在する」

これは、デカルトが哲学の基礎とした「われ思う。ゆえにわれあり」の自明性である。これは、「私」が何を意味するのか、「存在する」が何を意味するのか、を明確に説明できないとすると、その意味が曖昧である。(この命題の意味については後に、議論する。)

②論理学や数学の真理の本当らしさ「AはAである」「1+1=2」

これらの知は、論理学の正しさに依存している。しかし論理学の正しさは究極的には根拠づけられていない。(これは後に、分析的真理として議論する)

③物理学の本当らしさ「水は一気圧で100度で沸騰する」

後者は、科学法則が明日も変化しないことについて何の保証も持たない。帰納法に基づくが、帰納法が明日もだとする事の保証はない。(自然科学の正当性については、後で議論する)

④感覚報告の自明性「これは白い」

このような観察報告は確実であるように見えるが、しかし、これは単なる観察の報告ではなくて、傾性語である。もしこれが感覚についての報告であるとする、「なぜこれは白いと言えるのか？」と問われて、「白く見えるから」としか答えられないようにみえる。このとき、それをどのようにして正当化すればよいのか。(これも、あとで議論する)

⑤常識の自明性「私の手が二本ある」

上述のような哲学的な懐疑的な考察もまた、何らかの信念に基づいているはずであり、すべての信念を疑うことができないし、またそのような哲学的議論よりも、このような常識の方が、はるかに自明である(ムーア「常識の擁護」)。しかし、このような常識から出発して、科学はさまざまな常識を批判してきた。したがって、常識を無批判に受け入れることはできない(ラッセル)。

⑥言語を使用して考える限り、どうしても前提せざるを得ない超越論的条件がある。

それを疑うことはできない。たとえば、「私は存在しません」と主張することは、語用論的に矛盾する。それゆえに、「私が存在する」は真である。しかし、このような討議倫理学の論証は、古典論理の正しさを前提している。(これについては、後に議論する。)

=====

ミニレポート課題

1、<より広く>考えるとは、どういうことでしょうか。

2、あなたは、究極的に根拠づけられた知識があると思いますか？

思う場合：それは何かと、そう思う理由を書いてください。

思わない場合：そのことは社会や文化にどのような影響を与えとおもいますか？

3、以上に関連して、哲学的な問いを立ててください。

=====